

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19500858
 研究課題名（和文） 第2次世界大戦期におけるソ連邦科学アカデミーの研究
 研究課題名（英文） A Study on the USSR Academy of the Sciences during the Second World War
 研究代表者
 市川 浩（ICHIKAWA HIROSHI）
 広島大学・大学院総合科学研究科・教授
 研究者番号：00212994

研究成果の概要（和文）：傘下に多くの先端的な研究機関を集めることで、一国の研究活動全般の展開に圧倒的な影響力を発揮する、他の国にはない特有の組織となったソ連邦科学アカデミーは、独ソ戦開戦とともに、史上類例を見ない規模で疎開を実施する。本研究では、自然科学系・工学系の研究所を対象に疎開と戦時研究の実態を調査し、戦時における総体としての科学アカデミーの規模の拡大、科学者のソヴィエト社会における影響力の拡大と、その裏面における、研究所、研究分野による処遇、研究環境、生活条件の著しい差異を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Many advanced research institutes being affiliated with, the USSR Academy of the Sciences was a unique organization mostly influential in the entire development of scientific activities in the whole country. As the German troops rushed into the Soviet territory, the institutes of the Academy were evacuated to Kazan and other cities in an unparalleled scale in the history. Shedding a new light on the evacuation processes and the wartime research carried out by the institutes in natural and engineering sciences, this study clarifies the enlargement of the organizational scales of the Academy in general and the rise of authority of the scientists in the Soviet society, at the same time, the huge variety as for the impacts of the evacuation; the research circumstances and the living conditions among the institutes.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：科学社会学・科学技術史

キーワード：科学技術史

1. 研究開始当初の背景

ソ連邦科学アカデミーは傘下に多くの先

端的な学術研究機関を集めることで、一国の

研究活動全般の展開に圧倒的な影響力を発揮する、他の国にはない特有の組織となった。(1)戦時下の科学アカデミーについては、旧ソ連邦時代には、戦時下における科学者の活動がいかに対独戦勝利に貢献したか、という見地から顕彰目的の歴史叙述が行われてきた。(2)ソ連邦解体以降の新しい資料的条件のもとで、第2次世界大戦期のソ連邦の科学者の行動に大きな意味を見いだそうとしたのがN.クメンツォフである。クメンツォフは、戦争がソヴィエト社会にもたらした2つの重大な変化として、党=国家官僚集団の自信喪失とそれに反比例するかたちでの国民生活のさまざまな分野における“専門家”の権威の回復・上昇、大々的に繰り広げられた戦時入党キャンペーン=新規入党者の激増による党員構成の大幅な変化をもたらした党のイデオロギー的一体性のほころび、を挙げ、科学の諸分野でも“専門家の権威上昇”が進行し、かれらはその自律性を高めると同時に、ソヴィエト権力との一種の“共生”関係に入っていた、としている。

2. 研究の目的

しかし、このような地位上昇は例外なくあらゆる科学の分野にまで及んだであろうか。クメンツォフもその他の研究も、多くが、戦時下のソヴィエト科学者をめぐる特徴的な事例を挙げることでこうした結論を導出しているが、戦争の影響はあらゆる科学者集団、具体的には科学アカデミー傘下の研究機関に一樣に現われたのであろうか。クメンツォフらが挙げた事例に漏れたものも含め、科学アカデミー傘下研究機関への戦争の影響について包括的な調査が必要であろう。

本研究では、こうした視点に立って、科学アカデミー傘下の自然科学系・工学系研究機関の戦時疎開の様子、戦時研究の動向を研究

所ごとに網羅的に明らかにすることを研究目的とした。ソ連邦科学アカデミーは独ソ開戦時、計47の研究機関を擁していたが、このなかには、本研究の対象とならない、人文・社会科学系の研究機関も多く含まれている。研究代表者がモスクワのロシア科学アカデミー文書館のリストで確認したところ、第2次世界大戦期にすでに存在していた自然科学・工学系研究機関は31カ所である。6研究機関については資料的制約などから調査できなかったものの、筆者が調査しえた25研究機関は自然科学・工学系研究機関の大多数にあたる。

3. 研究の方法

本研究は、文献(書籍、論文、その他の図書資料)、および文書記録類(公文書、ドキュメント、データ等)を資料として、それらを読むことを通じて史実を再構成する、いわゆる文献実証の方法を採用する。その内容は、おもに、文書記録類の閲覧・摘記と文献の収集・分析である。本研究では、計5回(他の資金によるものもあわせると、7回)にわたり、モスクワ、サンクト=ペテルブルク、カザンに出張し(このほか、他の資金でエカテリンブルクにも出張した)、ロシア科学アカデミー文書館などで資料調査に従事し、こうして収集した資料にもとづいて正確に史実を明らかにすることに努めた。

4. 研究成果

本研究によって明らかとなった点は以下のとおりである。

(1)空前の規模で実施されたこの疎開のなかで、多くの研究機関ではその研究態勢に大きな変更がもたらされた。研究機関の戦時疎開は、利用可能な研究手段の性格に左右されることの大きい実験的研究を中心に、少なくとも客観的には、戦時研究へ研究者を動員する大きな槓杆となった。第2次世界大戦中にソ

連邦の科学者によってなされた戦時研究の努力は、対独戦勝利のひとつの要因として広くソヴィエト社会に認められ、科学者とその集権的な自治的制度である科学アカデミーは戦争を通じてソヴィエト社会における自らの地位を向上させるにいたったことは間違いない。

(2)しかし、同時に指摘しておきたいのは、研究所によって、戦時疎開の作用には大きな差があるということである。物理問題研究所を典型として、戦争終結が近づいた段階で、さっさと戦前の課題にもどろうとする研究所もあったが、なかには、核開発研究に深く取り込まれ、多くの研究員をモスクワその他に配置させることとなったレニングラード物理工学研究所、ラジウム研究所、および、レニングラードではなく、モスクワに“帰還”した化学物理学研究所など、その陣容の点でも不可逆の変容を経験した研究所もあった。

(3)より重要なのは、疎開の態様によっては辛酸をなめた研究所も少なくなかったという事実であろう。“封鎖”下のレニングラードから疎開を実施した研究所のなかには、その研究員の生命をも多数失うなど、悲惨な経験をしたところが多い。こうした研究所のなかには、生理学研究所のように戦時研究に挺身し、結果としてその規模を拡大したところもあるが、多くがその研究機能を完全には発揮できなかったものと考えられる。また、中央アジアに疎開した研究機関は疎開先ではその研究機能をほとんど発揮しえなかったと思われる。

(4)本研究で明らかとなった戦時疎開の影響の研究所間における差異が、戦後におけるさまざまな分野にわたる科学者集団間の力関係、競争関係などに影響を与えたことは容易に予想されるであろう。クレメンツォフが指摘する権力と科学者との間の全体としての

“共生”関係のなかでも、もうひとつのディメンションとして、こうした分野間の戦時における処遇、研究環境や生活条件の違いから派生する、科学者集団間の力関係や競争の諸問題を措定することはできないであろうか。

たとえば、いわゆる狭義の「リュセンコ事件」を検討する場合、本研究で明らかになった点、すなわち、彼の研究所（遺伝学研究所）が規模も小さく、戦時にはほとんど機能せず、したがって、戦後の論功行賞にあたっては大きくは評価されなかったであろうことがなんらかの意味をもってくるのではないであろうか。

また、研究代表者は、かつて、科学アカデミーとモスクワ国立大学、ふたつの物理学者集団を対象に、戦時における処遇の違いが、戦後における両物理学者集団相互間における軋轢、嫉妬、憎悪の背景となっていたことを指摘したことがあるが、このような対立は、物理学者以外には見られなかったのであろうか。

本研究における基本的な発見は、今後戦後旧ソ連邦の科学史を具体的に検討する場合、ひとつの重要な方法論的含意となるものと考えられるのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

- ① 市川 浩「【調査研究報告】戦時下のソ連邦科学アカデミー—その戦時疎開について(続報)—」『広島大学大学院総合科学研究科紀要Ⅲ 文明科学研究』第3巻, 2008年12月, 31~50ページ, 査読なし。
- ② 市川 浩「【調査研究報告】戦時下のソ連邦科学アカデミー—その戦時疎開について

て(Ⅲ報)一』『広島大学大学院総合科学研究科紀要Ⅲ 文明科学研究』第4巻, 2009年12月, 33~50ページ, 査読なし.

- ③ 市川 浩 「ソ連邦科学アカデミーの戦時疎開に関する一考察」, 広島大学大学院総合科学研究科社会文化論集編集委員会『社会文化論集』第11巻, 2010年3月, 1~28ページ, 査読あり.

[学会発表] (計 3 件)

- ① 市川 浩 「旧ソ連邦の“核の科学者”と冷戦初期のイデオロギー問題」, 於) 第20回西日本地区・ロシア東欧研究者集会(宮崎市), 2008年3月1日.
- ② 市川 浩 「どのような人たちが量子力学や相対性理論に反対したのか?—1940年代におけるソヴィエト物理学者の群像—」, 於) 日本科学史学会第12回西日本地区研究大会(桃山学院大学トマス館T-001), 2008年12月6日.
- ③ 市川 浩 「ソ連邦科学アカデミーの戦時疎開について—25の自然科学系・工学系研究所に関する調査結果—」, 於) ロシア科学アカデミー・S. I. ヴァヴィロフ名称自然科学史=技術史研究所技術史=工学史部「大祖国戦争勝利 65周年記念学術会議」(ロシア連邦モスクワ市), 2010年2月25日.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

市川 浩 (ICHIKAWA HIROSHI)
広島大学・大学院総合科学研究科・教授
研究者番号: 00212994

(2) 研究分担者 ()

研究者番号:

(3) 連携研究者 ()

研究者番号: